真言と解釈(10)

金子大榮

一

今日は、「精神主義の課題」の第二講として「人間の世界」ということで、専ら『大無量寿経』における三毒・五悪の説を解釈しようと思うております。

前には、人間の世界というものはどうにもならないようにできている、だからして社会科学的な思想で外から治そうと思うても駄目であるし、精神主義の立場で内から見直していこうとしても容易でない、ということを言ったのであります。ところが、それに対しては根本から反対することができるのかもしれません。人間は何とかしているのであり、そして世界は何とかなっているのである。それが現実である。どうにもできないということはなくて、何とかしている。であるから、どうにもできないというようなことは、それはある特殊の感覚であって、現実の世界はみんな各々思うようにやっており、そして世の中も何とかなっていくのでないであろうか、ということが言われているのであります。それは、今朝、まず今日学校で話さねばならないということを念頭に置きながら、新聞を開きました。そうすると、新聞に第一面からしまいまで書いてあることは何事であるかというと、世界の情勢の動きである。我々が考えている、宗教とか、あるいは厭世観というようなことについては何も言うていない。書物の広告ぐらいにちょ

っと出ておるのでありますけれども。おそらくそれは多くの人に問題にならないのでしょう。ただ、アポロ十一号はいよいよ月の世界へ行く、安保問題は来年に迫っている、大学の問題はかたずかない、自動車事故が多い、というふうなことが満載されております。それは、我々が生きていく上において非常に大事なことであるには違いない。しかし、人間はその情勢に動かされて、そして生きていて、それでいいのであろうか、ということも考えられるのであります。そう思いながら、またある書物をちょっと読んでみたのでありますが、それには、それが現代の情勢というものであって、何か知らんが、我々は無気味なところへ運ばれているのである、こうして人間はどこへいくのであろうか、というようなことも言われています。異郷という言葉がありますが、これは我々のほんとうのすみかであろうか、全く異郷へひき入れられているのでないか、というような感じもするのであります。しかし、ともかくもそこに現実の人生というものがあるのであるからして、それはどうすることもできないのではないであろうか、ということになると、どうにもできないというようなことは実際に触れておって何とか我々はやっているのであり、そして世界は動きつつあるのであると、こう言えるでありましょう。

それを無論承認の上で、それでよいのであろうか、我々はこうしていかなければならないのが運命なのであろうかと、人生に疑問・問いを発した時に初めて、どうにもならない世界であるということが出てくるのであります。ですからそれは、現実の人生に対する一つの人生観でしょうね。この世厭うべしということも、さらに我々は煩悩具足の凡夫であるということも、火宅無常の世界であるということも、今与えられている人生に対して、これでよいのかという問いを発し、そういうことによってのみ仏教の人間観というものが出てきたわけなのであります。そこに立って、その人間の世界というものはこういうものであるということを説いたものが、「大聖の真言」の上のどこにあるかということであります。これを広く申しますれば、仏教全体は人生観であり世界観であるということが言えるのでありますが、浄土の経典における世界観、人生観というものはどこにあるかといえば、『大無量寿経』における三毒段・

五悪段というものを見るよりほかないのであります。ですから、「人間の世界」という題目におきまして、その三毒・五悪段というものを今日は少していねいに見ていきたいのであります。

二

で、その三毒段というのは、その我々の生活を煩い悩ます煩悩の代表者として、貪欲・瞋恚・愚痴という、この三つが説かれているのであります。しかし、これは貪欲、これは瞋恚というふうに教えられたことによらずに、あるいはそういうことを思いながら経文そのものを読んでみますと、三毒とは要するに人間苦である、ということが考えられるのであります。そうして、貪欲のところに説いてあることは何であるかというと、すべて生活の苦しみであります。たとえば、所有物について申しますと、田なければ田あらんと欲い、家なければ家あらんと欲い、家なければ憂え、家あればまたそれを失いはしないかと欲うというように、つまり、なければ欲しいと苦しみ、あれば失いはしないかと苦しみ、というふうなことでありまして、それは経文を読めばよくわかることであります。そこで、私は感想を述べたいのです。その貪欲段には、全体として生活苦、人間が生きていくために苦しむということが説かれてあるのですが、生きていくために苦しむということは、何かを心配するということです。人間は何かを心配しなければ生きておれないのではないかということが思われるのであります。その何かを心配する上において、煩悩の交代、交代ということもおかしいですが、何かいい名前がないかなあ。つまり、煩悩というものは絶えないのです。絶えないということは、変わっていくのです。煩悩の中身は変わっていく。たとえば、ここにあるように、家がなければ家が欲しいと。ところが家があったら、その悩みの中身は、今度はなくしないようにということになる。こういうことですね。なければありたいと欲い、あれば失わないように思うと、こういうことで、煩悩が変わっていく。変わっていくけれども、なくならない。A→B→Cと、こう移っていくのであります。AはAのことを心配しております。Aのこ

とを心配している時には、これがもう一大事であって、この心配がとれなければと思うのであります。ところが、そのうちにBの心配が出てくるわけです。そして、Aのことはいつのまにか忘れる。我々が悩みを離れるということは、Aの悩みを離れることはBの悩みによって離れる、Bの悩みはまたCの悩みが出てくると離れる、ということであって、そういうことによって人間の煩い悩みというものは断続をしていくのです。それがやがて高じてくるというと、ノイローゼというような問題になるのではないですかな。だから、貪欲の煩いというものが、それがノイローゼ的になって、そして心配の絶えがないというのは、よくよく考えてみるというと、結局、生に執着をし、どこまでも生きておりたいのだという、そういうふうな生活の悩みであるということができるわけです。

瞋恚の煩悩の上に説かれておりますのは、生活の苦というよりは、人間の悪と言うた方がいいかもしれないのであります。ここには、まずもって道徳が説かれてあります。「世間の人民、父子・兄弟・夫婦・室家・中外の親属、当に相敬愛して相憎嫉することなかるべし。有無相通じて貪惜を得ることなかれ。言色常に和して相違戻することなかれ。」と、いわゆる法三ケ条をあげてですね、人間は互いに敬い愛していかなければならない、憎み合うてはならない、「有無相通じて」、我に有るものは彼に与え、我になきものは彼からいただいて、そして貪ってはならない、所有欲をおこしてはならない、言葉も常に合わないで背き合うてはならない、ということを説いて、そうしてそこから、人間はいかにその道徳を守らないかということで、いわゆる瞋恚の煩いが説いてあるのであります。しかし、瞋恚の煩いで説いてありますことは、怨憎会苦、憎いものと一つになるということですが、その裏には、愛別離苦がある。だから、愛別離苦というものと怨憎会苦というものとは一つである。四苦八苦といって数える時には、愛別離苦と怨憎会苦というものを区別しますけれども、この経文では裏表になっております。原始経典であったと思いますが、そのお経は忘れましたけれども、人間は死ななければならない。死ななければならないということは、死ぬのは嫌なのであり、その嫌なものに出会うのだから、これは怨憎会苦である。生きておりたいことに別れるのだから、愛別離苦である。だから、

愛別離苦というも怨憎会苦というも、要するに死の問題だ、というふうに説いた経典もあります。けれども、もう一つ読んだ者の感想から申しますと、その瞋恚段に説いてあることは、人のすることが気に入らないということになるようであります。こうなると、我に怒りはないとは誰も言えないのであって、人のすることが気に入らないというのがお互いの上にあるところの一つの悪徳でないであろうか。人のすることでも、よいことならば心からほんとうに喜べるということになったなら、もうその人は、確かに道のわかった人であり、あるいは信心をいただいた人であると、真実の念仏行者であると言うこともできるでありましょう。しかし、念仏を申していても、宗教を語っていても、どこか人のすることが気に入らないというようなものがあるとすれば、自分には瞋恚の煩悩はないということは言えないのであります。嫌なことでありますけれども、そこに人間がそれによって互いに競争し、そして互いによって励んでいくということがあるのだと、こう言えばそれまででありますが、しかしよいことは自分でしたように喜ぶということも大きな美徳でなくてはならないのであります。西洋の何かの書物で、その随喜の徳というものは、あまり向こうの人は尊ばないということを読みまして、まあそういうものかなあと思うたことがあります。そうしますと、随喜の徳というものは、これは特に仏教的なものであるかもしれません。誰がしたところで、いいことはいいことなのでありますから、したがってそれと競争するということとは別である。〃同行者の栄えることは心から喜ぶ。しかしながら、競争はいたします〃と言うた人がありますが、まあそれこそほんとうに念仏者らしい境地なのでありましょう。とにかく、瞋恚段を読みますと、人のすることが気に入らないということに帰するようであります。

第三の愚痴のところを見ますと、これは要するに、知識の無智ということになると思います。智者の愚かさ、もの知りの愚かさということです。説いてありますことは、善因善果、悪因悪果ということを知らないということです。善をなせば善を得、道をなせば道を得と、これはまあ等流の因果ということでありますが、善いことをすればさらに善いことができるということがわからない。だからして、私は因果の道理を知っていると言いましても、その因果の

道理というものは、善いことをすれば幸せになるのだから、自分は幸せを得るために善いことをするのだ、ということであるというと、それは善をなして善を得るということを知らないものと言わなければならない。これは人間の知識の愚かさです。みんなものをわかったように見えますけれども、そのわかっているということが、少しもほんとうに人間のあるべき相というものをわかっていないのではないか。そのもの知りの愚かさということが、それが経典の愚痴の上に説いてあるようであります。

こうみることにおきまして、『大無量寿経』の三毒段というものは、ただお決まりの三毒を説いたものでなくして、今日の我々にも大いに教うるところがあるということを考えなければならないのであります。

三

さて、五悪段であります。そこに説かれている五悪というものはいったい何を説こうとするものであるかということは、甚だわからない。五悪の裏には五善というものがあります。そこで、五善とか五悪とかいわれるものは、一般の仏教において、あるいは一般の道徳において、何に相当するかということにつきましては、昔の講者では二つの説があります。一つは五戒です。殺すなかれ、盗むなかれ、邪婬するなかれ、うそを言うなかれ、この四つは性罪と申しまして、それ自体が悪いのであります。それからもう一つ、酒を飲むなという、不飲酒戒というのがあります。これは遮戒と申しまして、酒を飲むことそのことは悪いのではない。そのことは悪いのではないが、なるべくやめた方がいいというのであります。その五戒というものが、いわゆる人間の道徳として必要なものであるということであります。だから仏教徒である限りは、せめて五戒ぐらいは持たなければ、我は仏教徒であるということは言えないではないか、ということもやかましく言われております。そうしますと、そう言われる方では、五戒のうちでも酒を飲むのだけは遮戒であって性戒でないのだから、それだけはいいだろう、あとの四つは、そう難しく言わないでも、自ず

からある線まで守れるのではないか、だから酒を飲むのだけは許してほしい、というようなことを言うているのであります。しかし、これは困ったことなんだ。時によると、酒を飲むために前の四つの戒を破ることがあるのです。酒を飲むということも程度の問題でありまして、その遮戒こそ実は、前の四つの戒を破るということにもなるようであります。そういう点において、五戒を持つということも容易なことでないのでありますが、その五戒を持てということを五悪段は教えるものであると、こういうふうな考え方があるわけであります。ところがもう一つは、戒というものは真宗にない。五戒であろうが十戒であろうが、戒を守らなければならないという、持戒持律ということは真宗にはないのである。だからこれはそうでなくして、仁・義・礼・智・信という、五倫五常ということだという説があります。これはだいたい儒教の教えでありますけれども、経典に説いてあることも儒教の精神と相通ずるものがあって、それが仁・義・礼・智・信ということに当るというのでしょう。すなわち、第一悪は仁に背き、第二悪は義に背く、第三悪は礼に背く、それから第四悪は智に背き、第五悪は信に背く、となってくる。とにかく、人義五常ということがあって、裏からいえば、五常を守れ、五常に背くなという人間の道を説かれたものであると、こういうふうに言うてあります。まあ、五戒を誡めたものであると思うてみれば、五戒を誡めたことになっておりますし、裏から五常を勧めたものであると思えば、そうなっておりますけれども、だいたいは五常説をとっているのであります。ただ、ここで一つ私が言いたいことは、その五常よりは五戒の方が、人間の道としては適切であるということであります。仁・義・礼・智・信ということは、つまり道徳の精神でありまして、実行ではないはずであります。実行はむしろ「なかれ」の方が実行的なのであります。「こうすべからず」の方が実行的であって、「こういう精神でなくてはならない」というふうな道意を説くということは、ほんとうは実際の道徳にならないのです。これは、私の考えでなくて、慈雲の『十善法語』に彼はそういうことを言っています。いかにもそれはご尤もと思うのであります。ですから、私は必ずしも五常の説はいいとは思わない。やはり五戒でいいのではないかなと思うのであります。

しかし、その五戒に合わせてみると、ある点までは合うのですけれども、第一悪と第二悪とどう違うか、第三悪とどう違うか、というようなことは容易にわからない。『大無量寿経』の講義をしていて、私は、これはだんだん罪が深くなるということがある、というふうに考えています。第一悪はパンの問題で、食うていけるか食うていけないかということによって、そこで悪を犯す。第二悪はパンの問題でなくてむしろバターの問題で、うまいものを食べたい、よく生きたいという、そこから犯されるものである。第三悪は性欲の問題でありまして、食べるに困らなくなり相当に豊かな生活ができるようになると、その次に出てくるのは、つまり女性の問題である。そして、女性の問題もある点まで愛欲が満たされるようになると、その次に出てくる第四は権力の問題である。経文を読んでみると、そのように出ております。つまり、こういうことを言うては悪いか知りませんけれども、相当に生活が楽になり、愛欲も満たされるようになると、その次に政治家になってやろうかというような、政治家は必ずしもそうでないかもしれませんけれども、何かそういうふうな権勢欲というものが出てくる。第五は、もう少しすると、山師などのように賭博的なものが出てくる。そういうようなものが読めるのです。それはなかなかおもしろい考えだというて話された人もありますけれど、まあそれで経典は読めるとは申しませんが、今私がこんなことを申しましたのは、あなた方もこれを読んで、そしてそこから、何を言い表わそうとするのであるかということを見ることによって、仏教で説くところの罪悪とは何であるかということを考えることができるだろうということなのです。

しかし今回は、そういうようなことを一切やめて、そしてずっと見ますというと、第一悪は、害し合う、互いに害し合わなければ生きておれない。助け合わなければならない人間が、その生活を見ていると、何とかかんとか害し合うている。それで第二悪は、欺き合うている、みんな騙し合いの生活をしておるということ。それから第三悪は、それによって社会の秩序を乱す。害し合い、欺き合い、そして乱し合うているところの、その生活をしているということが言えるのであります。そしてそれを押していきますと、第四、第五といく。第四は軽んじ合う、軽蔑し合う。人

間は互いに軽蔑し合って、人のすることはみなくだらないように考える、それが第四悪に出ております。そしてそこからはからいが起こる。今、人のすることが気に入らんということを申しましたが、それが行ないとしては、はからい合いということになるわけであります。このように、五悪段を読んでみますと、まだいろいろな問題があるのでありますけれども、とにかく五悪といわれる点においては、そういうふうなことが出てくるのであります。その悪の報いが、天罰を受けるとか、あるいは法律に触れるとかということにも及んでいるのでありますから、まあそこらもいろいろ考えなければなりませんけれども、要するに三毒・五悪の説というものは、手近な、我々にとって嫌と言えないものが説かれてある、ということだけは確かなのであります。

四

さて、ここに一つの問題があります。それは、そのように三毒・五悪ということが目に見えるように説かれており、嫌と言えないように説かれてあるにもかかわらず、宗祖親鸞はそのことについて何も言うておられないということです。真実の教は『大無量寿経』これなり、と言うて、何かにつけて、『大経』にはこうある、『大経』にはこうあると、こう言うておる親鸞がですね、人間生活の浅ましさ、人間生活のたよりなさを説くのに、『大経』の三毒段にはこうある、五悪段にはこうある、というようなことを、少なくとも『教行信証』では一ケ所も言うていないのであります。親鸞はそういうことを言うことを忘れたのであろうか。そうではない。そうではないが、そういうふうな明細な描写というようなものを好まなかったのであろう、ということは一つ考えられるのであります。書いてあるのを読むのはやむをえないけれども、自分の口からそういうことを細々と話すという気になれないということがあるのでしょう。

それと同じことは、地獄の問題についても言えます。地獄とはどんな所であるか、あるいは餓鬼とか畜生とかという

のはどんな生活をしているかということは、『往生要集』に詳しく出ております。その『往生要集』を読むと、何かいろいろと感じさせられることであります。私らのような粗雑な頭でも、時々こうに違いないと思わせる言葉が多い。多いのですけれども、親鸞はそれを言わない。ただ「地獄は一定すみかぞかし」という、この一句にとどめているのであります。『和讃』の中に「曾婆羅頻陀羅地獄」というようなことが出たり、あるいは「八万劫中阿鼻地獄に堕在して」という言葉がありますけれども、しかし源信僧都があれだけ書かれたのだからね、これが人間の相であると、地獄絵図に対する人間生活の象徴的意義というものをお説きになってもいいはずでないであろうか。しかし、それが言うてない。ある人が、それはおそらく源信僧都はやっぱり文学の才があって、けれども愚禿親鸞はそういう才がなかったのでしょう、と言うたそうですが、これも一つの考え方ですね。確かに文学的な才能がないと、ああいうものは書けないかもしれません。とにかくすべて象徴的ですからね。たとえば、鬼が罪人と問答してみたりね。ことに、誰も気がつく衆合地獄では、女性が木の上にいる、罪人は下にいる、木の葉がみんな下を向いて刃になる、ようやく上へ行くと、今度は木の葉が上を向いて、そして刃になる、とある。つまり、相い合うことのできない、恋している同士がどうしてもいっしょになることができないというところに、愛の悩みというものが説いてある。これはなかなかおもしろい表現であります。西洋には逆に、背中合わせになってどうしても離れることがないというのが説いてあるそうだね。離れることができないのが愛の苦しみか、いっしょになることができないのが愛の苦しみか、なかなかおもしろいことであります。そんなことを考えると、地獄の研究というものもよいことでありまして、山辺習学氏は『地獄の新研究』という本を書いています。『新研究』を読むというと地獄がおもしろくなってくる、と言うた人がありますが、まあそういうようなこともあるんだろうなあ。ほんとうに地獄へ堕ちたような気持ちでその地獄のことを語ることができるかどうか。

今申しましたように、地獄のことを書き集めた『往生要集』は、何か文学的に非常におもしろい。おもしろいけれ

ども、それによって、これが人間であるというその悲しみというものはかえって隠れてしまうというようなこともありそうなのであります。何か親鸞にはそういうふうなものがありますね。つまり、そうに違いない、とても直らないことであるけれども、それを語らんとすればかえってその感じが逃げてしまうというようなこともあったのであるか、あるいはその感じが深いから深いだけもう言うことはできなくなったということなのであろうか。私はそんなふうに思います。ともあれ、「地獄は一定すみかぞかし」という一句に源信僧都の著わした地獄の苦しみというものがみな摂められているのであるというふうに読まなければならないのでしょう。で、「地獄は一定すみかぞかし」というようなことがどうして言えたのであろうか。昨日でしたか、テレビの宗教論にちょっと耳を傾けた時にそのことが出ておりました。我々はうっかりしていますけれどもね、どうして「地獄は一定すみかぞかし」というようなことを心から言えたのだろうか、ということを考えてみますと、親鸞は、八寒地獄だの八大地獄だのということを見ていって描写する以上に、何かこういたましいものを感じたに違いないと思います。

そう考えますれば、三毒段・五悪段もそうなのであって、したがって説こうとするものは無論説いていいのであるし、そして説くことによって我々がいかに人間の生活は浅ましいかということがわかるならばそれもいいけれども、親鸞がそのことを言わなかったということは、ただ「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界」というふうな簡単な言葉を言う中に、三毒段・五悪段のことが全体的に思われておったのであると、こう感ずる方が正しいのであろうと思うのであります。

『歎異抄』第一章には、「罪悪深重煩悩熾盛の衆生をたすけんがため」とあります。そこでその罪悪と煩悩ですが、しいて分けますれば、三毒段の方は煩悩であります。五悪段の方は罪悪であります。したがって、煩悩という方は個人的なものです。つまり、前に、世界内自己、自己とは世界内にあるものである、ということを言いましたのですが、問題をその世界内にあるところの自己へ移せば煩悩具足であり、それを世界的にみれば罪悪深重であると、こう言っ

てあるのでありましょう。つまり、この世の中における我々の生活が煩悩具足であるし、そしてその世の中との関係において罪悪深重であると、こう言っていいのでしょう。だから、この前申しました点からいえば、こういう社会の内にいる自己としては罪悪というものを感じないではおれないし、そしてそれが自分の生活であるというところへ立ち返れば、煩悩具足ということを思わなければならない。しかしここで大事なことは、『歎異抄』においては煩悩具足ということと罪悪深重ということとは別なことでないということであります。これは、第一章に「罪悪深重煩悩熾盛の衆生」とあって、罪悪深重ということと煩悩熾盛ということとを結びつけてあります。第三章へいきますと、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と言うて、その悪人というのはどんな人間かというと、「煩悩具足のわれら」と説明してありますね。だから、煩悩具足であるということが、罪悪深重ということなのであります。

こういうことをなぜ私が言うかというと、これも極めて正直な話をするのですが、私にはこの罪悪感というものはもう一つパッとこないのです。自分は煩悩の多い人間だということはよくわかるのですけれども、罪悪の深重の者であるということは、煩悩具足の凡夫であるということほどわからない。あなたたちも聖教を読む時には、そういうことは正直に反省してほしいのであります。それで、痛感という言葉がありますが、煩悩具足の凡夫であるということは確かに痛感される。しかし罪悪深重ということになると、まあそうであると思うけれども、痛感することができないというようなものが私の中にあるのであります。そこから、いや、『歎異抄』では罪悪深重ということと煩悩具足ということとは別でなかったのだ、ということを見出したのです。だから、自分が煩悩具足である限りにおいては、それはもう罪悪深重に決まっているのである。「深重」ということを解釈する時いつも言うことでありますが、我々は罪が深いと、そう簡単には思えないですね。普通、意識して犯す罪は重い、そして酒乱で犯す罪は軽いと思っています。罪が軽いか重いかという時には、意識と無意識で分けるわけであります。だから、知らないで犯しましたと言えば、それは罪は軽い、知ってやったと言えば、甚だ重い罪である。これは法律でもそうなっています。けれどもね、

もう一つ人間の自覚の深さから言いますれば、知って犯した罪は浅く、知らずして犯した罪は深いのです。これは、仏教的な自覚において大事なことだと思うのであります。知って犯したのですからね、底が知れているのです。知らないで犯したということは、いかに人間の罪が深いかということです。罪が深いということは、そこに、いわゆる世間一般の道徳的な判断と、それから仏教の自覚的判断の違いがあるのでないでしょうか。ただ、道徳というものはどこかで決めたものですね。「理は人のつかさどるところなり、情は神の知ろしめすところなり」と、仏教的感化を受けたある国学者が言うておりますが、理というものは人間が決めた、人間がつかさどったのだから、そのつかさどった人間の決まりからいえば、知らずして犯したものは軽く、知って犯したものは重いと言わなければならない。けれども、このほんとうの神の心、ほんとうの自覚の精神からいえば、知らずして犯さなければならないというところに罪の深さというものがある。そこには逃れることのできない運命的なものがある。それは運命的な深さです。運命的であるから、そこに五悪というものが考えられるのです。害し合わなければ生きておれない、欺き合わなければ生きておれないようにできておるという、そこに人間業の深さというものが感じられるということもあるのでしょう。

そこで、その「罪悪深重煩悩熾盛」ということが、やがて世界観になる。そして、そういう世界においてある、そういう人の世である、ということを我々が知った時に、そこに何を求めるか。それが「欣求浄土」で、浄土を願わずにおれないということになってくるのでないであろうか。こういうところから、この世厭うべしという、この世界観的位置において、ことに浄土というものが願われてくるのであります。そして、地獄とか悪業とかということについては詳しく言わないで、ただ、「罪業深重」とか「煩悩熾盛」とか、あるいは「地獄一定」とかという、簡単な言葉で何か深い感じを表わそうとした親鸞は、今度は浄土のことになると、かなり詳しく、浄土とはかくのごときの世界であるということを説くようになられたのであります。

（本稿は、昭和四十四年六月二十三日大谷大学における集中講義、「真言と解釈」の筆録である。文責　編集部）